

モンゴルと私

～モンゴルで見たこと感じたこと～

川田 敏章

1. はじめに

私とモンゴルとの出会いは、今から8年前になる。友人に誘われ、一週間滞在した。それまでは特別にモンゴルに興味があったわけではなく、どちらかと言えばアメリカやオーストラリアなど先進国に興味を持っていた。しかし、遊牧民のゲル（移動式住居）での遊牧民のさりげないもてなしが、わたしの興味を変えた。

ゲルに入ると、家の主が「サインバイノー（こんにちは）」と挨拶し、椅子に座るように促してくる。座ると用件も名前も聞かず、塩の入った乳茶と乳製品が山盛りになったお皿を出してもてなししてくれる。用事があってもなくても、知り合いであろうがなかろうが、近所の人でも外国人でも関係なく家の中に招き入れ、同じようにもてなしをしていた。日本では考えられないこのもてなしが、私にはとても不思議に感じられ、モンゴルの遊牧民と深く付き合ってみたいと考えるようになった。

モンゴルの事を知るには、彼らと生活するのが一番だと感じた私は、1996年から約2年間、中国内モンゴル師範大学とモンゴル国立師範大学に留学した。留学期間中、モンゴルにおける牧畜作業とその儀礼の調査のため、モンゴル国バヤンホンゴル県ガロート郡の遊牧民と約一年間生活をともにした。

首都ウランバートルから約700km離れ、外国人との接触がほとんどない彼らとの生活は、決して楽なものではなかった。

正式な学術調査ではなく、モンゴル国立師範大学の教授の「川田という日本人が行くからよろしく」とだけ書かれた手紙を一枚持って突然現れた私は、戦争（ノモンハン事件）当時の影響もあり、「モンゴルの知か資源を狙うスパイかもしれない」と全く信用されず、受け入れてもらえるまで数ヶ月の時間を要した。彼らとの生活は、遊牧民の生活を知るとともに、全く異なったコミュニティーに溶け込むことの難しさや自分の意思を伝えることの難しさなどさまざまな事を教えてくれた。

本稿では、モンゴル遊牧民とともに生活した中で、私が見たこと感じたことのいくつかをまとめてみたいと思う。

表1. モンゴル国概要

国土面積	1 5 6 万 6, 5 0 0 k m ²
平均海拔	約 1, 5 8 0 m
人 口	2 3 5 万 3, 3 0 0 人
首 都	ウランバートル（赤い英雄の意味）
首都人口	7 7 万 3, 7 0 0 人
主要宗教	ラマ教（チベット仏教）
通 貨	トゥグリグ（Tug） 1 円 = 約 9. 1 6 Tug
公 用 語	モンゴル語

（在日本モンゴル国大使館ホームページより）

2. モンゴル語について

モンゴル国は、ソ連の強い影響下にあった社会主義時代、ロシア人でも簡単に文字が読めるようにチンギスハーンの時代から続いた伝統的なモンゴル文字を廃止し、キリル文字（ロシア文字）を採用していた。しかし、1989年に始まった民主化の流れの中で、再びモンゴル文字が公用語として採用された。

モンゴル文字は表音文字だが、英語などと同じように表記と発音が必ずしも一致していない。また、単語の語頭、語中、語尾のどの部分につくかで文字の形が変わるなど複雑なため、キリル文字に慣れた人々にはなかなか浸透していないのが現状である。そのため、現在はキリル文字とモンゴル文字が併用されている。

モンゴル語の文の構造は、日本語のそれとよく似ている。主語、述語などの語順はほぼ同じで、日本文の単語をそのままモンゴル語の単語に置き換えれば問題なく意味が通じる。

例えば、日本文「私の名前は川田です」はモンゴル語で「Миний (私の) нэр (名前は) Кавата (川田) гэдэг (です)」と、「あなたの名前は何といいますか」は「Таны (あなたの) нэр (名前) чинь (は) хэн (何) гэдэг (いいます) вэ (か)?」のように、日本語と同じ語順で表現する。

また、日本語の複合動詞、例えば「食べてみる」は「идэж үзэх」のように「идэх (食べる)」と言う単語に「үзэх (見る)」と言う単語をつなげて表現し、「入ってくる」は、「орж ирэх」「орох (入る)」と「ирэх (来る)」をつなげて、日本語と同じような用法で表している。

さらに、「どうする?」「どうして?」「どうやって?」「どうしたの?」という表現も、英語であれば「What shall we do?」「Why~」「How~」「What happened?」とばらばらの単語を用いるが、モンゴル語では、「яах уу? (どうする?)」「яагаад? (どうして?)」「яаж? (どうやって?)」「яасан вэ? (どうしたの?)」のように、「(どうする)」という基本になる一つの単語に疑問詞をつけたり、語尾を変化させることで日本語と同じように表現している。

このようにモンゴル語は、細かい用法や文法については相違点も数多くあるが、基本的な部分では日本語に非常によく似ているといえる。

モンゴルに留学するまで、ほとんどモンゴル語に触れたことのなかった私が、留学後、約半年で問題なく会話できるようになった理由は、この事が大きく影響していたと感じている。

表2. 日本語とモンゴル語の比較

A	B	C	
① ああ ② の ③ の ④ の ⑤ の ⑥ の ⑦ の ⑧ の ⑨ の ⑩ の ⑪ の ⑫ の ⑬ の ⑭ の ⑮ の ⑯ の ⑰ の ⑱ の ⑲ の ⑳ の ㉑ の ㉒ の ㉓ の ㉔ の ㉕ の ㉖ の ㉗ の ㉘ の ㉙ の ㉚ の ㉛ の ㉜ の ㉝ の ㉞ の ㉟ の ㊱ の ㊲ の ㊳ の ㊴ の ㊵ の ㊶ の ㊷ の ㊸ の ㊹ の ㊺ の ㊻ の ㊼ の ㊽ の ㊾ の ㊿ の	① ああ ② の ③ の ④ の ⑤ の ⑥ の ⑦ の ⑧ の ⑨ の ⑩ の ⑪ の ⑫ の ⑬ の ⑭ の ⑮ の ⑯ の ⑰ の ⑱ の ⑲ の ⑳ の ㉑ の ㉒ の ㉓ の ㉔ の ㉕ の ㉖ の ㉗ の ㉘ の ㉙ の ㉚ の ㉛ の ㉜ の ㉝ の ㉞ の ㉟ の ㊱ の ㊲ の ㊳ の ㊴ の ㊵ の ㊶ の ㊷ の ㊸ の ㊹ の ㊺ の ㊻ の ㊼ の ㊽ の ㊾ の ㊿ の	① ああ ② の ③ の ④ の ⑤ の ⑥ の ⑦ の ⑧ の ⑨ の ⑩ の ⑪ の ⑫ の ⑬ の ⑭ の ⑮ の ⑯ の ⑰ の ⑱ の ⑲ の ⑳ の ㉑ の ㉒ の ㉓ の ㉔ の ㉕ の ㉖ の ㉗ の ㉘ の ㉙ の ㉚ の ㉛ の ㉜ の ㉝ の ㉞ の ㉟ の ㊱ の ㊲ の ㊳ の ㊴ の ㊵ の ㊶ の ㊷ の ㊸ の ㊹ の ㊺ の ㊻ の ㊼ の ㊽ の ㊾ の ㊿ の	A ① Миний нэр Кавата гэдэг. (私の 名前は 川田 といいます。) ② Таны нэр чинь хэн гэдэг вэ? (あなたの 名前 は 何 といいます か。) B ① идэж үзэх ② орж ирэх (食べて みる) (入って 来る) C яах (どうする) ① яах уу? (どうする?) ② яагаад? (どうして?) ③ яаж? (どうやって?) ④ яасан вэ? (どうした?)

3. 遊牧について

モンゴルでは、首都ウランバートルなど都市部以外は、今でも遊牧を生業している。

遊牧というと、家畜まかせに草を求め、草原を自由に移動していくイメージが強いのではないだろうか。私自身、モンゴルを訪れる前は、そうしたイメージを持っていた。

確かに遊牧民は、家畜の草を求めて移動生活を行っている。しかし、草のある場所へ適当に移動するわけではなく、基本的には年に4回、それぞれ決められた宿営地を循環するように移動する。行き当りばったり移動しては、移動した先に草や水がないということも考えられるからだ。宿営地は、夏と秋は水辺の近く、冬と春は強烈な北西風を避けることができる山陰の南斜面。さらに水を得るため適度に積雪がある場所が選ばれる。

遊牧民は季節ごとに宿営地を決め、放牧地も宿営地にあわせて限定することで、どの季節にも手付かずの牧草が残るように移動生活を行うのだ。例えば、夏の放牧地の草が少なくなる頃、秋の宿営地に移り、それまで手を付けずに残しておいた秋の放牧地で放牧する。その牧草が少なくなると冬の宿営地、そして春の宿営地へと順に移る。そして一年後に同じ宿営地に戻る頃には、夏の放牧地には元のように草が生え、放牧できる状態に回復しているのである。このように、遊牧民達は自然のサイクルを計画的に利用するため移動を行っているといえる。

移動生活を基本とする遊牧民には土地所有の考え方はほとんど無い。たとえ自分の普段使っている放牧地であっても草の生育が悪ければ、何のためらいもなくほかの場所へと移動する。問題となるのはあくまで草の状態、仮に自分の土地として囲ったとしても草がなければ家畜は飢え死にしまうため、全く意味のないことと考えているからだ。

日本では、土地付き、庭付きの家を購入することが多くの人達の夢で、そのためにローンを一生払う人もいるという話を彼らにした時、「なんて不自由なことをするんだ。モンゴルならすべてが自分の土地で、すべてが他人の土地だよ。その方が気楽でいいでしょ」と言われた言葉が印象的だった。

彼らは羊、山羊、馬、牛、ラクダの五種類を家畜とする。この中で最も重要とされる家畜は馬と羊である。馬は移動に適した家畜であると同時に、かつて世界を席卷したモンゴル民族の誇りとして、またモンゴル遊牧民には切っても切れない人生の伴侶として人間同様に敬意を持って遇されている。一方、羊は肉、乳は食料として、毛皮は衣服の原料として、骨は子供のおもちゃ、フンは断熱材として余すことなく利用できる、実質的価値の高い家畜として評価されているのだ。また、牛は乳製品、山羊はカシミアの原料として価値が高く、ラクダは荷役、厳冬期の乗用に利用される。この五種類の家畜はそれぞれ好む草が違い、すべての家畜をまんべんなく飼うことで、草原の植生がバランスよく保たれているという。

モンゴルでは、生活に必要なもののほとんどを家畜から得る。防寒や調理、乳製品作りに使う燃料も例外ではなく、家畜のフンを利用する。家畜のフンの中でも一番火力が強く、火持ちのする乾燥した牛フンの乾燥したものが使われる。

日本では、牛のフンを燃料に使うというと汚いイメージがあるかも知れない、しかし、モンゴルではこの燃料を燃やした香りが、モンゴル人と

っては故郷の香りとして捉えられ、下の歌のように故郷を想う歌の中によく登場する。

アルグリーン	オター	ボルギルスン	(牛フン燃料の煙が立ち上る	
マルチネー	ゲルター	トゥルスン	遊牧民の家に生まれた私は	
アダル	ヘール	ノトガー	この荒涼とした大地が	
ウーリーン	ベイ	シグ	サナタガー	自分の 身体のように愛しく思える)

実際、乾ききったフンは緑の良い香りがしていた。

遊牧民の住む住居は、中央の柱から折りたたみのできる蛇腹状の壁に、棒を傘上にわたして組み合わせ、その上からフェルトを何枚も重ねて覆ったゲルと呼ばれるものである。非常に移動に適しており、組み立ても解体も1時間程度でできてしまう。部屋の大きさは大体六畳程度。中央にかまど兼ストーブがあり、奥の正面に仏壇や家族の写真たてが置かれ、壁沿いに折り畳み式ベット、衣類箱、食器棚がいくつか置いてあるだけで、豪華な調度品も家具もない。生活

に必要なもの以外、無駄なものは一切見たことがなかった。

例えば衣服。モンゴルデールと呼ばれる民族服は、晴れ着と普段着をそれぞれ一枚、下着やシャツもほんの数枚もっている以外、余分な服は一切持たず、ぼろぼろになるまで着尽くす。特に厚手のモンゴルデールは、一枚で布団にもなり、厳冬期には裏に毛皮をはって防寒ギにもなる。また、袖が長くなっているのが家畜を追うための鞭やはたきの代わり、布巾にもなる。

モンゴルでは人が一生の間に着ることのできる服の数は、神によって決められていると信じられている。つまり、新しく服をおろすと寿命が縮まるということの意味している。そのため、遊牧民達は服に非常に価値をおいている。私の滞在した遊牧民の家では、子供に新しい服をおろす時、儀式を行っていた。

新しい服を子供に着せる前、その服を犬に着せる。その後で子供に服を着せると数がカウントされないという。そして、子供に服を着せた後、年長者が

オルト　ホイモルン　デール　オナガ　ダーガ　トンゴチ	（前の裾の上には子馬が溢れ
ホイト　ホイモルン　デール　ホニ　ホラガ　トンゴチ	後ろの裾の上には子羊が溢れ
エゼニー　ムング　エデン　ヘブレグ　バイグ	服の持ち主の財産は数え切れず
ドトール　ホイモルン　デール　トス　ウーフ　ヤバグ	裾の中では家畜がもっと太り
エレフ　ジル　エネース　ゴイ　デール　ウムスーレイ！	次はもっと良い服が着れるよ
	う祈ろう。）

と祝辞を述べ、新しい服を着る子供の幸運を祈る。

このように服に価値を置いているだけに、逆に古着や人が袖を通した服を着ることは、その人の運命を背負い込むとしてとても嫌う。

私がモンゴルに滞在していたとき、日本からたくさんの援助物資が届いていた。その中には古着が多く含まれていたが、その古着をさして「なぜ日本人は古着ばかり送ってくるんだ。失礼じゃないか」と怒っているモンゴル人に会った。日本ではお下がりという習慣もあり、古着を着ることに抵抗を感じないため、好意として送っているのだろう。しかし、受け取る側の文化、風習をよく知らずに送ってしまうと、せっかくの好意が悪意として受け取られてしまうこともある。ボランティア、援助をしていくには、送る先の事情を知り、決して一方的であってはいけないと感じた。

また、日本はモンゴルへの最大の援助国となっている。援助額は年間100億円にものぼり、モンゴルの国家予算に匹敵する。この国の行方を左右してしまうほどの援助に疑問を感じるモンゴル人は少なくない。そして、そのうちの何人かからは「日本はなぜこんなにモンゴルに援助をするんだ？返せなかったらどうする？戦争のときのようにモンゴルの領土を狙っているのではないのか？」と聞かれた。この言葉は、ばかばかしいとは思いながらも、援助額の割に、その真意あまり伝わっていないことを実感した。逆にいえば援助を行う側がしっかりと意思を伝えていないために生じている誤解で、非常に損をしていると感じた。

4. 移動について

普通、移動にはラクダと馬が使用される。トラックが使われることもあるが、民主化以降の経済の混乱によるガソリンの高騰などにより、燃料の心配のいらぬ家畜を利用する遊牧民が多い。

ひとつの家で、だいたい5頭のラクダに家財道具をのせる。1頭のラクダには、約250kgの荷物を載せることができる。移動距離は10kmから100km程度。長い距離を移動する場合は、途中野宿をすることもある。

私の経験した一番長い移動は、秋営地から冬営地への約100kmの移動だった。冬は昼間でも-30℃を下回り、人も家畜も厳しい移動を余儀なくされる。移動中、狼に狙われたり、寒さで家畜が凍死してしまうことも少なくない。しかし、彼らは移動中に死んでしまう家畜は必要ないと言う。弱い家畜は群れ全体を弱らせるからだ。その意味では、移動は群れの質を維持するために有効な手段だといえる。また、このことは、家畜はあくまで家畜であって、決してペ

ットではないということも意味している。

移動中はゲルをたたんでおり、目的地に到着してもゲルを組み立てるまでは携帯食以外は何も口にすることができない。そのため、草原では自分の家の近くを移動していく人たちがいたら家の中に招き入れるか、もしくはお茶と食事を持って出て、もてなしをするのが暗黙の了解となっている。私も移動中に見知らぬ家に立ち寄りもてなしを受けたりしたが、こうすることでお互いの情報を交換できるメリットもあると感じた。

彼らとともに何度か移動を経験したことで、初めてモンゴルを訪れたときに興味を覚えた、どんな相手でも分け隔てなく歓迎する習慣が、常に移動を余儀なくされる遊牧民たちの助け合いの精神と、実質的な情報交換の方法が日常化したものだと理解することができた。

図 1.モンゴルの子供たちの絵

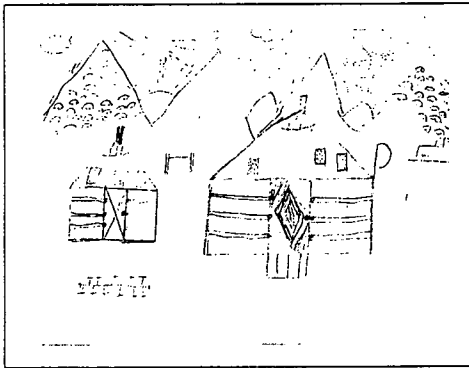


図 1-1 私の家 (7歳)

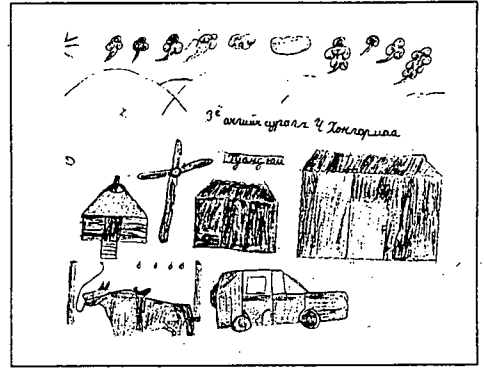


図 1-2 私の家 (11歳)

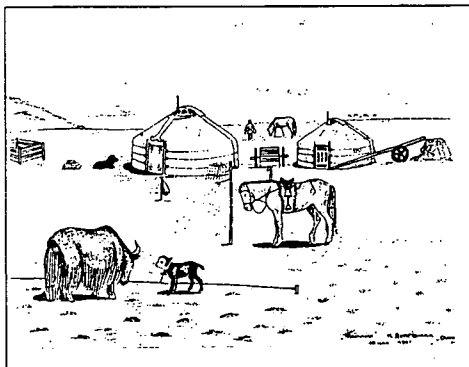


図 1-3 私の家 (18歳)

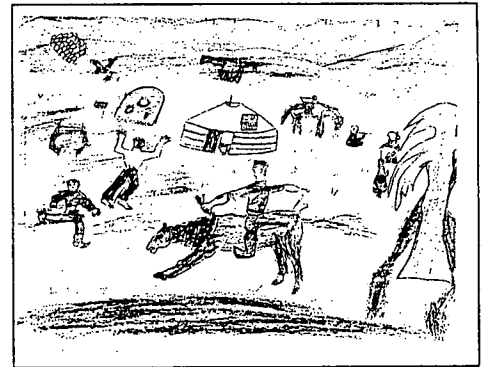


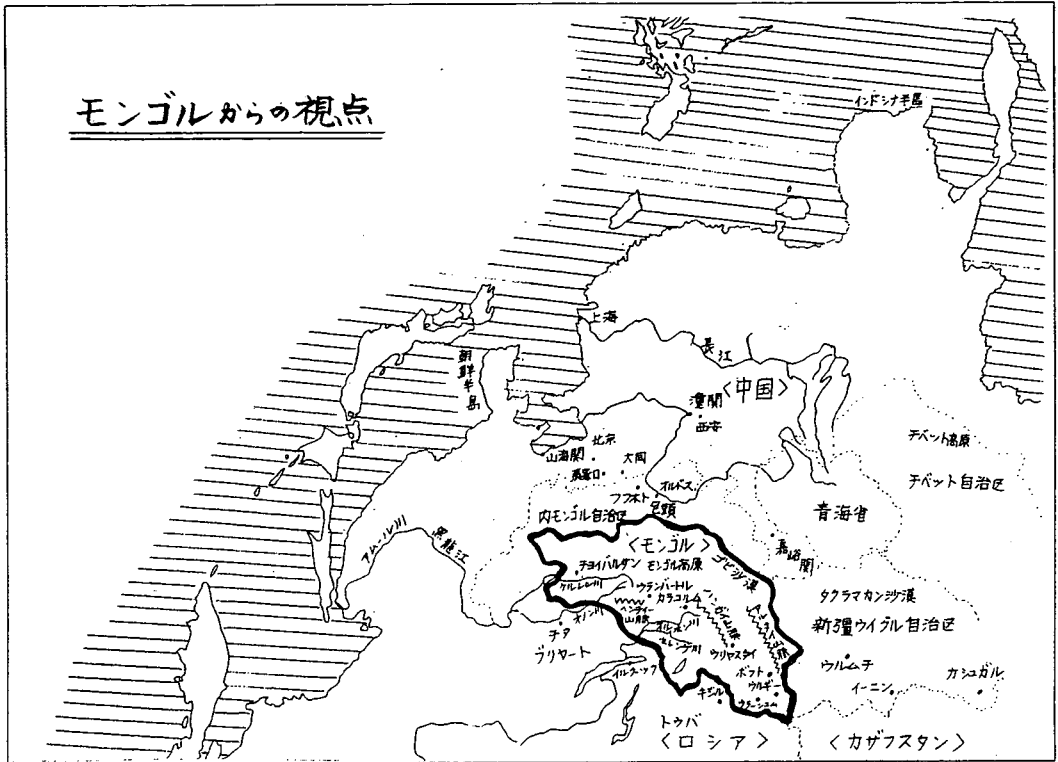
図 1-4 馬の調教 (12歳)

6. まとめ

ここまで、私が遊牧民と生活したときに見たこと、感じたことについて述べてきた。本稿をまとめるにあたり、地図を紹介しながらモンゴル、そして遊牧が持つメッセージについて触れたいと思う。

私たちは普段北を上にした地図を見ることが多い。しかし、この地図のように上下反転させてみると今までとは異なった視点から世界を眺めることができる。

モンゴルからの視点



この地図から浮かび上がってくるメッセージは二つある。

一つは簡素さ。移動を前提としたモンゴル遊牧民の生活では、物の蓄積が自ずと制限される。彼らの目的は家畜を増やすことである。しかし、頭数を増やしすぎれば家畜が牧草を食べ尽くしてしまい、結局自らの生活を苦しくすることになる。こうした環境の中で、遊牧民たちは自分の能力、環境に応じて必要なものだけを財産として持ち、自分のレベルにあわせて「分相応」に暮らし、極端な貧富の差のない社会を形成している。

物をなるべく多く蓄積することに価値をおく生産性至上主義、経済至上主義の上に成り立ってきた現代文明は、現在さまざまな弊害が噴出し、行き詰まりを見せている。

多くの人々が満たされない心を抱え、癒しの時代が叫ばれる時代、分相応に簡素に暮らすモンゴル遊牧民の生活は、これからの文明に大きなヒントを与えてくれるのではないかと感じる。

二つ目は自然環境に対する配慮である。遊牧は自然のサイクルをそのまま利用し、農業のように土を掘り返したり、工業のように天然資源を消費し続けるようなこともない。むしろ、自然環境に手を加え、変えることは自分を苦しめることとして、最大限の配慮をはらって生活している。

天然資源の枯渇や世界規模の環境破壊が大きな問題とされる今、自然環境に負荷をかけずに生活する彼らの精神は見習わなくてはならないだろう。

このように、見慣れた地図を逆さまから眺めてみることで、一見非文明的な世界と思われがちな世界の中に、今まで気がつかなかった未来へのヒントは数多く隠されていることを紹介し、本稿を締めくくることとしたい。